

# 臨床青年心理学研究 (Ⅷ)

—対人恐怖の人間学, その1, 症例提起—

池田博和 伊藤義美<sup>1)</sup> 田畑治

## I はじめに

対人恐怖症は例外なく思春期に発症する。それも比較的早く、ほとんど中学時代のはじめにその発端の認められることが多い。この点において、対人恐怖症はもっとも青年期危機的な危機状態であるといえることができる。この時期において、人はそれまでの児童期におけるいわゆる即自存在的なあり方から、一挙に対自存在としての自己に目覚めることになる。このような自己の両側面をいいあらわす不可欠の要請として、「超越論的自己と経験的自己」(Blankenburg, W., 1971), 「ノエシ的自己とノエマ的自己」(木村 敏, 1975), あるいは「存在論的自己と経験的自己」(Laing, R. D., 1965) 等々、さまざまな概念が提起されているが、それは最も単純化して把握するならば、「意識する自己」と「意識される自己」のことであり、それほど重大な間違いにはならないであろう。思春期において自己がこのような二側面に分化し、しかもそれら両者は違和感なくひとつこととして統合されていなくてはならないというところに、人間という動物だけに負わされたやっかいな課題が存している。このような誰もが乗り越えねばならない課題に直面して、それがうまく統合されず分化したまま、不自然な状態にとどまっているというあり方が、とりわけ対人関係場面において尖鋭的に問題化されている様態こそ、対人恐怖症と呼ばれるものなのであろう。もう少し詳しくいえば、人が人との間で「自分を出していく」という自己表出<sup>1)</sup>、すなわち *Sichdarleben* ということにはさまざまな水準での表出が含意されているが、なかでも明確な態度や言語的な表出以前にすでに、人はまず身体的存在であることにおいて先験的に世界との関係のうちに投げ込まれており、そうした世界や他者との前志向的な、いわば「気」に近い次元での表出、—それは Zutt, J. (1963) にならって「感性的体験領域」(*ästhetischer Erlebnisbereich*) における表出と呼んでもよい—において、とりわけすでに否応なく自己が他者の前にあらわされてしまっているような自己の属性

が、すなわちすでに他者にみられ、きかれ、あるいは匂いがかかれ、感じとられているような自己表出の諸側面それ自体が、「他者からみたならば必ずや」という前提の上で、つまりその人がそのように「気」遣いをすることによって、意識する自己にとって耐えがたく不自然になり、どうしようもない違和感をもって強迫的に前景化されている状態が対人恐怖症であるといえることができる。

こうした対人恐怖症的心性は、ごく軽い傾向も含めるならば、かなり高い割合で日本人の多くにみいだせるものであると思われる。また、こうした自己の両側面を統合していくという課題が、意識されるとされないのにかかわらず、誰もが一度は通らねばならない関門であるとするならば、対人恐怖症的心性はいわゆる「正常な」心性との間に強い連続性のみられるところとなる。しかしながら、われわれはすでに「序報」(田畑・生越・池田ほか, 1977) において述べたように、青年期危機一般の、従ってこの対人恐怖症もまたその、最も重篤な病理の極は、人間学的に接近された分裂病性の存在様式にきわめて近いもの、あるいは時としてそれ自体であると考えている。青年期危機一般や対人恐怖症というものと精神分裂病というものと間に一線を画しておくことは、疾病論的には勿論、意義のあることではあるが、神経症圏や「正常」圏にあることによってかえってヴェールに被われてしまうことになるその本質は、人間学的分裂病論の視点から接近されてはじめて、その十全な姿が露呈され、理解されることが可能となる。以下、この点を明らかにしていくことに本論の主眼がある。

以上の意味において、対人恐怖症は「正常」と「異常」の接点にある病態であるといえることができるし、この問題を主題とすることにおいて、「異常」を通して「正常」にアプローチするというわれわれの臨床青年心理学的な基本的姿勢を具体的に示すことができると考えるものである。

われわれはこのようさまざまな病理水準での対人恐怖の症例を経験してきたので、その中の数例について報告し、以上の視点からの論議を行おうと思う。ここにおいて、青年一般が思春期特有の課題に対してどう対処していくのが、健康なあり方であるのかという問題につい

1) 名古屋大学教養部

ても示唆が与えられることになれば幸いである。青年期危機への治療論的側面の問題については、不十分ながら別にまとめたところ(池田, 近刊)でもあるので、ここではとくに対人恐怖症状の病理学的な諸様相に焦点をあてて、どのような Sichdarleben のあり方が問題化されているのかということをも明確化するよう記述していくことにしたい。この第1報においてはまず、症例についての現象学的な記述を提起し、これらをめぐる文献的検討、およびわれわれの視点からの総合的考察は次報において行いたいと思う。

なお、症例1と2は神経症的防衛の基礎に、明白に分裂病性の現存在経過を認めることができる点において境界例領域に属するものであるが、両者は症例1が防衛としての症状の頑固な形成がみられるのに対して、症例2は自己の自己性の問題へのはるかに直接的な対面がある点において対照的である。症例3から6は神経症圏のものともみることができるが、なかでも症例6は一過性の反応として経過したケースである。病理性の重いものから軽いものへと配列したのは、上に述べたように異常から正常へと接近しようとするという理由によっている。症例5は伊藤、症例6は田畑、その他は池田が担当した事例である。

## II 症例提起

### 1. 症例1 A男 来談時19歳、二年目浪人中の男子

#### 1) 主訴

外出すると人の視線が気になる、緊張して表情がこわばる。集中力、持続性がない。トイレで他人がいると小便できない。

#### 2) 家族構成

現在57歳の父親は、戦時中フィリピンに出征し、戦後は銀行員となったが、定年二年前に電子技術関係の会社に転出し、役員をしている。小柄ながら、いかにも会社役員風の意志と決断力のありそうな人であるが、少々神経質そうで患者に関しては「生活指導をしてほしい、スポーツをやらせたい、どこか禅寺にでもやりたい」というような外面的管理のことばかり述べている。A男の母親は、白血病で十年以上の病床生活ののち、彼が中3の時、亡くなった。彼に対しては大変に過保護で甘やかし、何から何まで彼の手となり足となったという。その二年後に父親は再婚。その44歳の継母は、彼に対してかなり批判的なところもあり、少し冷たい印象を与えるが、「デリケートな反面、子供達にはいいたいことをいう」人だという。他に26歳の兄がひとりいるが、彼は「自己中心的で我関せず、自分は自分、人は人という感じで本ばか

り読んでいる、イエス、ノーのはっきりした性格」であるといい、いわゆる schizoid 的パーソナリティの持ち主であるらしい。

#### 3) 内的生活史

彼の乳幼児期のことについては、父親の記憶はあまりはっきりしないが、父親も盲愛したといい、両親そろって甘やかしたことが問題だったと父親自身思うという。とにかくおとなしい子ではあった。身体もあまり丈夫ではなく、リンゲル注射で生命をとりとめたこともあった。実母が病気だったため、彼と非常に密着していて、外に出て遊ばされることも少なかった。母親は子供の頃、ちょっと高いところへのぼっても、すぐにやめなさいとったり、友達と遊んでいると窓から顔を出して、危いから駄目といって非常に過保護だった。今考えれば、もっと危いことをするくらいの方がよかったと思うと彼自身いう。そういうことのため非常に内向的な性格になり、外ではおとなしく、家の中ではわめきちらして発散するような内弁慶になってしまっていた。

幼稚園はカトリック系のミッション・スクールにいったが、この時からすでに人の中に入っていくことがうまくできなかった。運動神経が鈍く、意志薄弱でイエス・ノーがはっきりいえないようなところに小さい時から劣等感があった。トイレで、他の人がいると小便できないのは、この幼稚園の頃から続いている。

小・中学校時代は一回づつ転校したが、もともと人になじめない方だから、途中から入っていくことはなおさらならなかった。放課でも皆の遊びの輪の中に入っていけず、ひとりボサッと机の前に座っていた。結局それでも、似たような性格の人で、小・中それぞれにひとりづつの友達はいた。そういう友達はいたけれども、社会性というか外向性というか、そういう面では孤独だった。先生からも、非社交的だとか内向的だとよく書かれた。

中学3年の時に母親が死亡したため、高校は父親の郷里の祖父と祖母の許から通うことになり、「家からはなれたさびしさや友達ができない孤独感が強く感じられた。私立のあまりいい高校ではなく、皆強そうなので、そういう連中がズラッとならんでいると、中学の時に番長から金銭をゆすられたことが思い出されて、高校の廊下などはいつも人を避けるように下をむいて歩いていた。

そうしたら、顔をそらしたとか下をむいて歩いていると人からいわれたので、意識して顔をあげて歩くようにした。この時(高3の夏)から、歩いていて人とすれちがう時に人の顔をみるのが普通なのか、みないのが普通なのかかわからず、自然にふるまえなくなった。これがきっかけで人の視線が気にかかりだした。僕は人の顔の覚えが悪いので、人から街で声をかけられても誰なのか

想い出せない。向こうから人がくることがわかった場合、何秒くらいみている、いつ目を離れたらいいのかとか、そういうことに金縛りになって、外に出ると、自分の行動がすべて作為的になってしまう。“眼つけ”とか“対人恐怖”とかいう言葉をきいて暗示にかかったようにも思う。それと体操の時間が嫌だった。両脚に湿疹のあとがあるので半ズボンをはきたくなかったし、もともと虚弱体質で体操は得意ではなかったから、そういうことも人を強く意識する原因になったと思う。

そのことは高3になって急に気にかかるようになったというよりは、もっと前から少しづつ積み重なってきたという感じがある。今考えると、小さい時から外を歩く時には下をむいていた。下に注意をはらってないとつまづくというのか、とにかく下ばかりむいていて、よく注意された。小さい頃から神経質で内向的で小心で、病気になる素質があったように思う。そのため友達ができないし、人となじめない。だんだん大人に近くなって、自分の性格が弱すぎることに目覚めたというのか、しっかりしなければいけないと思うようになった。あまりにもみじめで情ない。自分自身に腹が立つ。自分の性格が怖い。」

こういう意識がはげしくなる前年(彼が高校2年の時)父親は再婚したが、そのことは彼には一切知らされなかった。「全然知らなかった。正月休みに帰ったら(義母が)いた。しかしそういうことは理解して割りきっていた。世の中というものが段々にわかってきていたから、洗濯や掃除もあるし、一言も相談がなかったのも、しょうがないんじゃないかと。結局、自分は離れていたのだから。」この義母には「わざわざうちみたいなのところにきてもらって(御苦労なことだ)」と思う一方、「もうひとつ何かなじめない、ある程度しょうがないけど、もうひとつ通じあわないところがある」と最近でも思う。

高校3年時は症状が気になって、勉強は手につかず、受験には失敗した。浪人一年目の時、森田療法の診療所に4カ月入院したが、著効はなかった。その年も入試はうまくいかず、二年目の浪人となった。予備校にも在籍しているが、最近はほとんどいかず、自室にこもって勉強している。明け方近くにおきて、昼まえにおきる。しかし勉強はあまりはかどらない。第一、勉強のやり方がわからない。要領が悪いので、あっちに手をつけたり、こっちに手をつけたりしてちっともまとまらない。大学病院の精神科に通院して、服薬もしたが、あまり効果もないのでいきたくない。予備校にもいけなくなったことから、紹介されてこの相談室にきた。

#### 4) 「症状」について

彼がくりかえし述べている対人恐怖症状についてまと

めておくと、大体次のようになる。

家にいる時はいいが、外に出るといけない。他人と顔をあわせるのが嫌、目をあわせたくない。こういうところ(面接場面)のように、心が通じるというか、わかってくれる場合は楽。知らない人がくると困ってしまう。人の顔にばかり集中しちゃって、そればかりが目についてしょうがないので、下をむいて歩いている。結局、いつも自然な態度にもっていかう、もっていかうと考えてしまう。歩いていて相手の顔を見るのかみないのか、何秒くらいみるのか、横断歩道で止まっている車の運転手の顔を見るのが普通か、みないのが普通か、横から歩いてきた人の顔を見るのが普通か、みないのが普通なのかかわからない。それで緊張して、表情がこわばり、歩き方もぎこちなくなる。人が後を歩いていると、自分の歩き方が変だと思われるんじゃないかと思う。外を歩く時は能面みたいになっちゃうと母からもよくいわれる。自分でも顔がこわばっていることがわかる。

電車にのると、人からみられている気がする。眺め返せないで、そのまま下むいて座っている。自分の表情がこわばっているし、他人に悪い感じを与えるんじゃないかと思える。相手の顔を見ても相手に悪い感じを与えるような気がするし、下むいていても相手に悪い感じを与える気がする、どっちにしても目のやり場に困ってしまう。とくに一本道なんかで、前から人がくる場合、100m前にパッとみてから、すれちがうまでの間が眼のおき場に困る。階段をのぼっていく時でも、おりてくる人の顔を見ないと悪いのかなと思う。みるとまた、それも悪い感じを与えるのではないかと思ってしまう。

人がどんな風になっているのか観察してみたこともあるが、ますますこうした方がいい、あしたの方がと態度をつくるようになって、ぎこちなくなってしまうと結局、問題の解決にはならなかった。

朝のラッシュ時などのように非常に多勢の時の方がいい。かえってまばらな方がいいけない。結局、人間みたいに意志あるものに弱い。動物とか植物とかはいい。

今までに、みかえすこともやってみたこともある。そうしたら睨んでいるといわれた。顔がこわばっていて、下むきに猫背で歩いちゃうから、上目づかいになってしまう。それで自信をなくして、人の顔を見ることができない。

普通の人は適当に右みたり左みたりして、無意識的に流れているが、自分の場合はすべて意識的に右をむこうかと思って右をむいている。態度が作為的だから、人からみてもわかると思う。

電車の中で人は「何だあいつ」とか「クソ」とかといったり、僕の顔みて席をかわったり、舌うちしたりする。

高3の時、自転車で通っていて、交差点で止まった車の運転手が「何だあいつ」といった。舌うちされたりすると、何か非難されている感じがしてふりかえってしまう。これで、人がいないのに声がきこえると幻聴になるけど……。この間も二人の男の外人が前を通っていて、ウェットとかいった。僕の顔がしめった顔をしているといったのだと思う。高校時代も、朝登校するのに人にあわないように7時頃出たり、夕方暗くなってから帰ったりした……。

#### 5) その他の問題

以上のような対人恐怖の症状以外に彼の述べる問題をまとめておけば、次のようになる。

……小さい時から内向的で小心、いつも人のいいなりに、劣等感が強い。人がいると排尿できないし、鼻が悪いので、口で呼吸せねばならないから運動クラブに入る自信もなくて、心臓もそう強くない。小学校の頃は大きな夢があって、将来は建築家とか医者や弁護士になりたいと思ったけど、今は平凡に人並みに給料もらってやっていければいいと思っている。しかし、先のことを心配ばかりしている。今日は晴れていても、いつか雨が降るというように、もし父が亡くなったら、このままではいけないし、と悪いことの方を考えすぎてしまう。地獄の底もないというのか、心配症、破滅主義というのか、不安になる。

昔から自分が出せない。自分の意志とは反対に偽善的になってしまう。頭ではわかっているのに、それが行動ではもうひとつのみこめない……。

家にいれば楽だけど、このままでいいのかという追いつめられた気持ちになる。追いつめられてうまくいけばいいけど、そうでなければ、人を傷つけたり発狂したりするのではないか、あるいは自殺とか、生存欲が強いから自殺もできないだろうけど、発作的に……やる可能性はありえる……あるいは自分が死にきれない反動で、人を傷つけたりするのではないか、家にいる時はそんなことはないけど、外にいて意志の制御を超えた時には……。

努力しようのない病気。意志で努力しても、自然な態度は出てこないし……極端にいうと、武道とか護身術を身につけるのもいいだろうけど、外へ出るのが困ってしまう。勉強だけできても駄目だと思うし……。

どんな職業でもくらししていけなくはないと思うが、それを生きぬいていくのは精神力でしょう、人を踏みたおしても、という。それが自分にはない。劣等感がふさがる、どうしても自分は並じゃないというのか……。

生きていくためには、お金がないと何もできない、大学にも入れないし、家も建たない、病気になっても、医者にもかかれないから、小遣いは全部貯金している。そ

ういうふうについて何か不安な考えになるのが悪いクセで、心配症というのか、高校の時は体操の時間のことばかり気になっていた。

それに自分は要領が悪い。人を踏みたおしてもというよりも、いつも踏み台にされる方。正義感をもっているわりに、悪を容認してしまう。成績で一番になっても、それは二番三番の人間がいるから自分が一番になれたのだと思ってしまう。いつもみじめな想いをしてきたから、自分が一番になると、他の人がみじめな気がして落ち着けない。人から何かをされた時、ここまでは怒りみたいなものがあったとしても、そこから先に出ない、それが精神面の弱さだと思う。

幼稚園はキリスト教系ので、右の頬をうたれたら、左の方もさし出せとして育った。しかし実際にはそうはいかない。こっちがおとなしくすれば、要領のいい奴がつけ込んでくるわけでしょう。キリスト教だって、実際には愛の教えどころか、十字軍で侵略したり、異端者を火刑にしたりして残酷なことをしている。

田舎の祖父と祖母の家は庭があるし、八帖の自分の部屋があるので、そこで勉強したい。家にも、父親に出ていけといわれるし、それが苦しい。やっぱり病人というのは家の中でやっかい者にされても、自分の立場としてはしょうがないんじゃないか。去年入院してお金使ったり、兄の結婚にもさしつかえるし、家の中にいてお金を使ったりすると、一歩さがる感じになる。母親は「今の若い人は暖かいご飯しか食べない」とか米屋や友達に僕の悪口をいっているみたい。もう二浪しているし、夕食の時にこれは5円高くなった10円高くなったとかいわれると、夜勉強している電気代ももったいないと自分で思ってしまう。十のうち七は僕が悪いとは思うけど、十全部僕が悪いみたいな感じに思われる。それで自分の部屋に閉じこもってしまうか、ふとんかぶって寝てしまう。田舎に帰るのは、祖父や祖母に迷惑だろうから、入院したい。このままではたとえ入試に受かっても社会生活できないのではないかと思う。

#### 6) 治療経過

この他、主に母親からみた状態像について記しておく。この他、主に母親からみた状態像について記しておく。彼は極端に外出嫌いですと家にいるので、学用品も母親が買ってくる。運動もしない。時間のとり方がルーズというか散漫。その日によって違い、アンバランス。精神的に乳ばなれができていない。近くの耳鼻科でも母親と一緒にいってくれないと嫌だという。自分の思い通りにならないと、小さい子が駄々をこねたみたいになる。何かあると、病気に逃げこみ、人に頼る。この間は精神科医のかいた新聞記事を読んで、自分は分裂病ではないかといっていた。真夏で暑いのに、綿入れ

のチャンチャンコを着て、手にうちわをもち、誰がみてもおかしい格好をしている。母親の身体中をさわりにくるので、気持が悪い。先週はずっと部屋に入って、つかい棒をかって閉じこもっていた。相談室にきたがらなくて、荒れる。名大にいくとかつての同級生にあうのではないとか、その他何かとりとめのないことをいう。自分というものがいないから、周囲のことで自分がゴチャゴチャになってしまって、コントロールできなくて、母親にバンバン当たりちらす。父親や兄に対しては抑制しているが、母親に対してはちょっとしたことが大問題になり、すぐに「ウルサイ、馬鹿ったれ」「この馬鹿が！」とって威圧的というか粗暴なふるまいに出る。本人は今の時代に大学を出なかったら、恥かしくて外も歩けない、公務員も受けられないといい、名古屋にはいい大学がないから東京にいくというが、理想と実際にできることが全くアンバランス。テレビをみている時も部屋を密閉して、閉じこもっている。それとしゃっ中貧乏ゆすり。子供っぽく、ちょっとしたことで怒って興奮する。ものとり方が短絡思考で、感情の起伏についていけない。自分で自分が処しきれなくて、すぐに部屋につっかい棒をかって入ってしまう……。

こういう状態で、家族も本人も入院を希望していたので、精神科病院に紹介することになった。数カ月にわたる面接過程の中で、結局充分には関係が形成されず、筆者としては不本意のまま中断となったケースである。

## 2. 症例2 B子 来談時19歳の女子短大生

### 1) 主訴

便秘がちでお腹の具合が悪いので、いつも自分の体から匂いがもれている。そのため、人に迷惑をかけているような気がする。不安が強く、気分の波があって、落ちこむ。

### 2) 来談過路

筆者が彼女とはじめてであったのは、彼女が短大1年の時の後期であった。筆者は彼女のいる短大に非常勤でむき、「精神衛生」の講義を担当しているが、受講生が非常に多いので出席を確認するために、当時は受講生の着席する席をあらかじめ決めておくことにしていた。その最初の授業の時に、決められた席に不都合があるものは申し出るようにさせたところ、やってきた数人の学生はもっと前に移りたいと希望したが、ひとりだけ一番うしろの席にしてほしいと述べた学生がいた。それが彼女であった。

こうして、最後列の端に座った彼女は、しかしその後ずっと大変熱心に、身を乗り出すようにして受講し、授業後はほとんど毎回、不明な点を尋ねにきたものであっ

た。

それからちょうど一年が過ぎた9月、講義後の筆者を訪れてきた彼女はためらいがちに色々語り、結局「主訴」に述べた問題を明らかにした。そこで、以後は相談室に場をうつして、正規の治療面接が行われることとなった。

### 3) 家族構成

彼女は54歳の父親と51歳の母親との間の第二子、長女である。6歳上に兄があり、他に同胞はない。両親とも干渉的で穿さく的な反面、何となく冷淡で、彼女には受け入れられていない感じがあるという。

父親は同族会社の役員をしており、家庭のことについては比較的無関心である。母親は私立女子高校の教師をしているが、男まさりのいわゆる教育者というタイプで、一家はこの母親を中心にしまわっている。父親に対しては失望や不満があり、そのとぼっちりがB子にむかってくるという。母親は生果問屋の次女に生まれ、いつも家の手伝いをさせられた。その姉は評判の美人で、彼女はこの姉と比較されるのを嫌がり、勉強面で頑張っかなり優秀なところまでいった。彼女は非常にプライドが高く、逆にB子がちょっと自信のあるようなことをいうと、「何を傲慢な」とやっつけ、人にはプライドをもてないようにさせる人であり、そのため、B子はいつも裁かれているような気がしている。母親は自分が努力家なので、B子がどんなに意気消沈している時でも「一生懸命やらなければ」というだけで、B子は余計沈みこんでしまう。母親には夫に仕えるとか男を立てるとかという面はまるでなくて、自分が少しも女らしくないのに、人には家事をやれとか娘らしくないというので、B子は頭にくる。服装とか髪型とかの外面的な様子から、人のことをあれは不良だとか何だとか断定し、よその家に行ったこともないのに「よその家ではああだ」とか「どこそこの娘さんはこうだ」とかといって、いつも人の目や世間のことばかりを気にしているのが耐えられない。B子の話はフンフンと喋ってきいているようにみえても、実は何もきいてない。いつも命令しておいて、決断したのはあんだだよという。B子と母親は、つまらないことでよく激しい口論をするという。

26歳の兄は、大手不動産会社の経理に勤めている。この兄は小さい頃から素直で何でもよくいうことをきいたよい子として母親の眼には映っている。彼は「普通の男の人とは違って、何でもペラペラとしゃべってしまう人であり、両親に認めてもらえなければ幸せになれないと思っている」ところがある。「何でもすぐ親に相談したりして、ちっとも精神的に自立ができない、男としての魅力のない」人間だとのことである。彼はとくに性的な冗

談や卑猥な話を好み、家の中でもそうしたことをよくしゃべって、「体験すれば顔に出る」などというB子の反応をためすようにする。そういう話になると父親は逃げ出し、母親も以前は嫌がっていたが、最近ではニタニタと笑って、話に加わっている。B子もわざとドギツイ話をするようにしている。この兄も、そしてまた母親も、かつて一時期ノイローゼになり、通院していたことがあるという。

B子が何かやろうとすると、父親はそれに対して、はげますよりはむしろ、自信をなくさせ不安にさせるようなことばかりいう。母親はB子を自立させないようにしておきながら、口では自立しろ自立しろという。期待だけかけておいて、嫌ならいいんだよとつきはなす、ああせよ、こうせよといておいて、結局そうやったのはあんただよ、という感じで耐えられない、父も兄も母に同調するし、家中から理解されていないとB子はいう。

#### 4) 内的生活史

幼少時期のことについては、あまり語られてはいないが、ただ自分が充分に愛されてはいなかったという想いは強い。彼女が幼稚園の頃、父親らの経営していた工場が火事になり、事業は閉鎖された。父親は他のある会社に勤務し、母親も考えた上、縁故で高校に勤めさせてもらうようになった。両親とも家にいないのが心細い感じがして、彼女はいつもおそくまで友達の家遊びにしていた。

小学校の時は、自分に対してすごく自信があった。成績もよく、いわゆる「できる子」で人にも優しくてまじめなところが長所だと自分でも誇りをもっていた。しかし、ちょっとしたことで急によく動悸が激しくなることがあった。五分から十分の間、心臓がドキドキと強くうち、目まいがして、困りが黄色くかすんでくるので、すごく心配になって病院にいったが、心電図に異常はあらわれなかった。

中学は都会の名門女子学園に進んだが、それは母親が何としても彼女を四年制大学に入れるために、そうさせたのであった。小学校の時は親友もいたが、地元を離れてひとり自分だけが都会の中学に電車通学することは、すごく心細くさびしかった。中学・高校はいつも孤独を感じ、心のあせりをもっていた。とにかくその学校が嫌で嫌でしょうがなく、ただいまわしいだけの六年間だった。

中学1年の時から、水泳がすごく嫌いでその前になると、下痢を起こしていた。もともと以前から胃腸は弱かったが、いつもは便秘ぎみで、何か心配事があるとすぐに下痢になった。その頃、このことはそれほど気にはしていなかった。それよりもむしろ中1の頃からオナニー

をしていたことに強い罪悪感があった。級友たちの間では、彼女が表面的にはクールで男っぽく格好よく思われていたので「エース」という愛称で呼ばれていた。

高校は同じ学園で同級生も同じだったが、高校1年の時、席替えがあり、ある級友がすぐうしろの席になった。この級友とはもともとそれほど親しくはなかったが、彼女は少し以前にちょうどB子の住んでいる地域に転居してきており、その母親から駅頭で「こっちにきましたのでよろしくお願いします」といわれていた。自分のお腹の調子が悪いので匂いがもれて、そのうしろの子にいつも迷惑をかけているような感じがして、気になった。この精神的圧迫は強烈なもので、もう生きていくことさえ不安であった。ひどく落ちこんでゆううつになり、胃腸の調子はますます悪くなって、心の不健康さと体の不健康さが相互に強めあい、悪循環していた。どこへいってもそのことが気になって、電車ののりでもそのことばかり気にしていたので、学校も休みがちになり、学校に行くのが怖かった。授業は全然頭に入らなくて、汗をびしょりかいて早く終れ早く終れとばかり考えていた。

中学に入った時からルールに、世間並みというルールにのせられているというか、親のいうなりになっていくという気がしていて、高校2・3年の頃はそのことをすごく感じていた。全く無気力になって、虚無、ニヒルという感じで何もやりたくなく、成績もガタッと下り、完全に自信を失った。点数のことばかり気になって、勉強しなければいけないいけないと重苦しく思いながら、気ばかり焦って何もできなかった。やらなければと思えば思うほど、やりたくないという反動も強く、結局後悔ばかりが積み重なっていった。四年制の大学にということでは母親が望んでいたが、自分の中にも入りたいという気があって、それだけがすべてみたいだった。しかし、実際には勉強は何もせず、行事とか遊ぶようなことだけやっていた。

この頃、同じような感じの四、五人の仲間があって、彼女たちがやろうということについていく感じで、やっていた。高慢で我が強くて、人には批判的で、不平不満はいいたい放題のことをいっていたが、自分の本質とか症状のことは、いいたくても絶対にいえないという苦しさがあって、交換日記をしても、自分のことについては「エースは何もいわない」といわれていた。そういう親しいグループの中にも、匂いのことは気になり、皆と一緒にいたいと思いつつ、離れたところにいたので、皆は自分のことを変った人間だと思っていたようだった。

すごくわがままでプライドが高く、人のことはよく批判するくせに自分が批判されるのは嫌だった。負けん気ばかりが強く、劣等感と優越感が入りみだれていた。内

心では、成績や点数への執着の反動からか、「たとえ成績がどんなによくても、心のすさんだ利己的な人間では駄目だ、これでいいのか、おまえの女としての優しさや人間らしさはどこへいった」と自問をくりかえしていた。考えれば考えるほど、わからなくなり、みじめで苦しく、ボロボロの状態になっていった。

やさしく女らしい、人間らしい人間になるために彼女は同じ学園の短大に進んだ。四年制大学を受験するために浪人を覚悟することはできなかった。そういう生活はとて彼女には耐えられそうにはないと思われ、それよりも短大で本当の自分を、ゆったりとした心のゆとりをとりもどしたいと思ったからだった。

しかし、納得したつもりではあってもやはり心のどこかに四年制大学への未練のようなものが残っていて、母がそのことをいうたびに心にグサリとつきささった。そのため短大入学後は四年制大学に編入することだけを考えて勉強した。四年制の学生に敗けないと意地になっていた。どの授業にも全部出ないと気がすまないという感じで出席し、わからないことは積極的に先生に質問にいった。彼女には何事も最後までとことんつきつめていかないと気がすまないという面があって、はりつめきった気持でいた反面、ただ気楽になりたいと思っていた。後期になって「精神衛生」の講義を受け出してから、自分は授業を受けるより患者として先生のところに行った方がよいとずっと考えていた。このままだと絶対、人間として駄目になるという感じで、これが自分に与えられたチャンスだとか、神から与えられた救いの手のような気がして、これをのがしたらもう一生駄目だと思われた。しかし、それは相当勇気のいることだった。

四年制大学にいくという世間的な見栄から逃れようとして逃れられない自分に弱さを感じ、自分は本当に人の言動にまどわされる人間だと思った。自分はただ、この世に漂っているだけだという気がして、本当に自分である自分に、自分の確固とした意見をもち、人にまどわされない人間になりたいと思っていた。講義に出てきたアイデンティティの拡散の話には、自分に当てはまることが沢山あった。家では、母親と喧嘩し、父親とのしりあって滅茶苦茶やっていた。喧嘩をしていてナイフをもち出したこともあった。この家にいると絶対、自分は駄目になるという確信はあった。反抗しながらも結局は甘えていたから。

2年の夏休みには、編入のことはもうあきらめていた。就職して社会に出ることも怖く、もっとモラトリアムがほしいと思っていた。こうして9月になって、ようやく決断し、筆者の許に相談にくることを実行に移したのであった。

## 5) 「症状」について

面接開始後三年にわたる治療経過の記録は膨大なものとなっているが、ここでは本論の主眼、すなわち *Sichdarleben* のありかたがどのような様相において問題化されているのかという点を中心に彼女の陳述を記載しておくことにしたい。

「前回、今まで誰にも話せなかったことが話せたので、気が楽になった。家では誰にも受け容れてもらえない感じなので、他に愛の対象をもとめて教会にいつている。いずれは受洗したい。教会員の人達に自分の問題を相談してみようかとも思うが、それぞれの人の背後にはそれぞれの生活があるし、人をわずらわせたくないで話せない。聖書には“愛せよ”とでていて、自分が人を愛せないのは、自分が愛されてないからだろうと思う。授業を受けてから、すぐ自分のことがわかるようになった。」

(10月頃、会社訪問)「自分が本当に就職したいのかしたくないのかわからない。いいかげんな気持で就職していいのだろうかと思う。だから就職試験には受かりたくない。ここ二、三週間すごく不安で毎日、夜になると泣けてくる。夏休み明け頃、四年制大学にいつてどうするのだと考えても答が出てこなかった。そんないい加減な気持では長続きするはずがないと思って、編入はしないことにした。高校では優秀な人が多かったので、皆有名な大学に進んだが、母は自分の娘がそうならなかったことをすごくやしがった。親の期待に沿えなかったというか、それには反撥するのだが、本当に反撥していいのだろうかとすぐ不安になって、そういうふうにならされてしまっている。自分から何かをやって失敗すると“そらごらん”といわれるので、自分から何かをやろうとすると不安になってくる。例えば鳥かごの中のカナリアみたいなもので、出よう出ようと思うんだけど、出るともどこへいったらいいかわからない。自立もしたいけど不安定で不安定で怖い。結婚もできないと思う。」

だから何かやっても失敗すると、すぐに自信がなくなる。今までは自分が弱いことを知らずに、肩をはり、意地と見栄をはって強くみせていた。高校の頃も男っぽいのでアイドルみたいになって、本当の自分を出せないでいた。本当の自分は弱くて中味は空っぽで依存的なのに、そういう枠をはめられると、相手の理想を壊したくなくて期待に沿うようりりしく、格好よくふるまおうとして、疲れてしまう。たまに弱音をはくと、らしくないといわれて、そうすると何か認めてもらえないような気がして、自分は強いんだと自分にいいきかせて、外だけでもそうみせるようにする。それはひとつの演技みたいになっていく。自分を作って、これは自分じゃないと思

いながら、やっぱり世の中はこうやって生きていくのかと思ったりして、結局疲れている。すごく人まえて作る傾向がある。自分をひたかくしにして自分の本質をみせたくない。どうせ人は理解してくれないという大前提があって、人と話すとき必ず話を聞く立場になってしまう。以前、自分をさらけ出し過ぎたことがあったが、それは相手にとって重荷であることに気付いてからは自分のことを話すのはやめてしまった。」

「高校時代は神経的、肉体的に病人で、自分のことだけで精いっぱいになって、自己中心的なことばかりやっていた。心の中ではこれでは駄目だとわかっていた。だけど、どうしようもなく何もやりたくなく、何をやっても燃えることができなかった。このままで一体、どうなっていくんだろうと考え、生きるのが嫌になったというか、死のうと考えたこともなくはないが、死んだら終わりだと思って生きのびてきた。普通の人は何げなくやる自分が自分にとっては必死だった。しがみつような悲痛さで生きていかなければならないというか、今もそうで、生きていることが悲惨な戦いみたいな感じがして、本当に楽天主義というかそういう人を見るときうらやましくて、自分にもそういう考え方ができたらもっと楽になるのになあと思う。何でも気楽にはできない。すべて重く受けとっちゃって、深刻すぎてしまう。いい加減なことが嫌で完璧主義というのか、逆に完璧にできないから、どうせできないと思っていい加減になる。そうするとまたいい加減にしかできないということで自己卑下して、自分と付き合っていると疲れてしまう。」

「編入のことも考えていたが、その目的が勉強したくてするのではなくて、モラトリアムの時間がほしいという不純な動機なので、そんなのではいけないと思う。教師になりたい気持ちもあって、勉強しなくちゃいけないと思っていたが、こうもちゃらんぼらんで無責任では、先生なんていう責任の重い仕事にはつけない。何でも納得してからではないとやりたくない気持ちがあって、普通の人にいわせると行動してみてもはじめてわかるというが、私の場合は納得してからやるというふうなので行動が先にでない。頭の中でしばらく分析して考えてからしかできないので順応がおそく、皆からはおくらせてしまう。何のために生きているのかその目的がわからないと、生きることができない。かりに就職で採用してもらえた場合に普通とは逆に不安を感じてしまう。無責任ないい加減な気持ちで入るわけだから、会社にとって悪い気がする。自分は空っぽで、自分の道を求めるために会社を利用するみたいで、足手まといになるし、第一あんなに忙しい仕事をとても自分はやっていけないという気がする。

今は何も責任のある仕事はせずに、ゆっくりしたい。

そうするとまた世間体があって、母に何をいわれるかと思う。自立させてくれるような前提を親たちは何も作ってくれなかったのに、早く自立せよとおびやかされる。今までずっと親の敷いたレールにのって、嫌だ嫌だと思いつつも外れることができず、本当に自分の人生ではないみたいな気がする。このままいけば、就職してお見合写真もってきてもらって、そうして結婚して、結局どうなるのかと思う。もっと時間がほしい。このまま会社訪問にいったって、そんなことはないと思うが、もし気に入られてしまったら困ってしまう。本質的に自分のいい加減な気持ちが怖い。流されていってしまう。やっぱり会社に入るということが怖い。」

(彼女はESSクラブのドラマサークルのチーフで、近く外国語劇のコンクールがあり、その主役に決っている。)「今は不安の方が先にたつて、勉強にもドラマにも手がつかない。それと就職のこともあって三つ巴でまわってしまっている。どうしても不安が先だつて、先々の気苦労ばかりしてしまう。人から大丈夫だよといってもらえれば落ち着くが、そういつてくれる人もいないし、父母に話せば逆に自信喪失させられる。だから自己暗示をかけないとやっていけない。自分は理想が高すぎるのかもしれない。本当の自分はこうじゃない、もっと上にあるんだつて、上の方ばかりみている。かと思うとすごく自己卑下して極端に両面があって、その裏で自分を高くにみている。」

「就職試験は面接で落ちた。ありのままの自分をみせて、それで入れてもらえるならと思って、本当の気持ちを話したので協調性がないようにみられたのだと思う。やっぱり社会は厳しいなと思った。面接官はにっこり笑って人を斬るという感じ。社会に気に入られる顔を見せて、当たりさわもなく通っていかなくちゃいけないなという気がした。しかし自分をいつわり通してまでは、そんなことはできない。またふりだしに戻った感じで、また違う道が開けてくるようであれしかった。自立が怖いので、まだその時がこないというのか、基礎ができてないままに自立してもまた崩れるという気がして、親に頼るのが嫌で自立したいと思ったのに、結局は親に頼らなければ生きていけないという甘えたところがある。

人の言葉がグッと胸に残ってしまう。それが冗談だとしても悪い方悪い方にとれて、不安が雪ダルマ式に大きくなっていく。そうするとその一点にだけ集中して、何もやりたくなくなる。寝込みたくなって祈りたくなって泣けてくる。人の何げない言葉を意味深長にしてしまうので、ほんのちょっとしたことですぐに傷ついてしまう。だから、ちょっとしたことが一々問題になる。たとえば、どうして自分はここにいるんだろう、どうしてこ



んなことやらなきゃいけないんだろう、一体自分は何なんだろう、どうしてここにこういうものがあるんだろう……。人間というもの、自分というものが信用できない。今までは自己流に色々やってきたが、認められなかったり失敗したことが多かった。偏見とかひねくれた目でものをみる面が強いので、自分のやり方でやるとどうも人と違う。人の愛し方とか受け容れ方とか見方とか、だから自分のやり方に自信がもてない。自分の考えと自分の到達した概念で生きようとする、間違っただけでいく気がするので、神様の力を借りる。」

「この1週間はドラマ（ギリシャ悲劇「アンチゴネ」）のことばかり。男役（クレオン王）をやればやるほど抵抗がある、役に喰いつくされるというのか。あんな役をやっていると、普段もスカートは絶対にはけないし、そういう女だといわれそうな態度になる。完全に男に徹するように心がけて、たとえば心ときめくようなことはしないように、クラブ関係の男の人にもあわないようにするとか……。とにかく早く終わってほしいという感じ、逆に終わったらもう何もなくなるのを恐れているが。」

「結婚する友人がいて複雑な気持。他の女の子と比べると、自分は全然違っている。自分は人とあっても絶対にニコニコと笑って話しかけるといようなことはできない。教会の女の人も皆、女らしい人達についていけない。グループでいる時にはわあっと騒げるが、一対一になると硬くなって、自分を作ってしまう。皆と馬鹿な話をして笑っていても、本当は心の中で悩んでいることが沢山あって、そういうのをぶつけても相手は不愉快な想いをするし、わかってももらえない。本当は自分が弱くて、みじめなことを考えて苦しんでいることを人に知られるのが怖い。何をやってもさめた部分がある。馬鹿騒ぎをするかひどく白けているかの両極端。結局、症状のことに戻っちゃって、はしゃぎきれないというか、喜んだあとには必ず悲しみがやってくる。だから何をやっても最終的に虚しいなという感じになってしまう。」

「劇をやると、いつも男役がまわってくる。女役の方が無理がなくて疲れないが、いつも疲れない状態でいたいのに疲れる状態になってしまう。役になりきれないのと恥かしい。演じている時はいいけど、終わっても同じように演じている王としてみられるのは嫌な感じがする。ただ男役の方が格好をつけてできる、そういう意味ではやりやすい。」（結局、ドラマ・フェスティバルでは彼女たちのグループが優勝した。）

「心が開放されていなくて、本当の自分を出すことができないし、怖い。完全主義に落ちこむか、ふてくされて醜さをさらけ出して自分を殺してしまうかのどちらかしかできず、普通にいるのが難しい。人と話すのが怖く

なる。人の話を聞き流せばいいのを、ひとつひとつ聞いてあげようと思うので無理がある。自分とは関係のないことはわからないし、それをどう聞いたらいいいかわからない。それよりも自分の聞いている態度自体が相手に悪い印象を与えるのではないかと先に考えてしまう。世間話は苦手、うわべだけで話をするができない。

自分がバラバラで、本当の自分がわからない。わかっても出せない。いつも自分のことを否定して、本当の私はこれではないと思う。普通の人と同じような人間ではない、一般的な人間ではないという気がしてならない。個性的な人間になりたい、人と一緒のような人間にはなりたくないと思う。そう思って六年間過ごしたら実際にそういう人間になってしまった。逆に今は平凡になりたいと思っている。何かが違うと思う。具体的に座席はいつも一番うしろにしか座らないという行為自体が特殊になってくる。皆がワイワイ騒いでいるのに、ポツンと他の所にいたり、皆と騒いで笑ったあとに、シラッとしたり、人が楽しそうに笑っているのをみても、全然面白くない。まわりの人は女らしいのに、女らしくない。自分を出して話せない。社会に適応していくのがすごく難しい。ひとりで何かやると、小さな子供みたいに急に気が小さくなって、寂しくみじめになる。自分だけが疎外されている。結局ひとりだから、ひとりで生きていくようにする。そうすると逆に、ひとりで生きていけなくなる。ともかくうまく生きられない。自分を開放しようすると、普通にできなくて妙になげやりになる。自分で自分を責める。完璧に生きることができないから、自分を戒めることによって生きようすると、不完全な部分をもっと大きくクローズアップされてきて、自分は駄目なんだと思ってしまう。いっそのこと、自信過剰で生きられたらと思うが、それも傲慢になりそうになってしまうので抑える。傲慢というのはすごく嫌い、自分が誉められていい気になって得意そうな顔になるのが嫌。無理に人との間に壁をつくっているの、近よりがたいところがあるとみられている。」

## 6) 治療経過

以上は短大2年の12月までの間に述べられたことからの抜粋である。12月初めのドラマ・フェスティバル以降は、虚無的な無気力状態が続き、翌年1月にはある四年制女子大学の編入試験を受けることに決めたが、疲労感ばかりつって勉強はほとんど進まなかった。「人のちょっとした言葉や視線が全部意味ありげに思えてしまう。編入しても、本当に何がやりたいのかはさっぱりわからない。大学でブラブラしていたいとも思うけど、今までみたいな派手な態度をとれば、浮き上って順応できないのではないかと思う。何かもの悲しくて泣いたりするこ

とが多い。」

ちょうどこの頃、兄の結婚がほぼ決まりかけていた。このことと関連して、この頃から夏頃にかけては、結婚についての話題、およびとりわけ性に関するこだわりの問題が中心となっていた。3月には編入が決定したが、適応できるかどうかの不安が強く表明されていた。

4月から新しい大学に通いはじめたが、とるべき単位が多く、びっしりつまった授業を、人から離れて、ただ聞いては帰ってくるという感じで、何となく日々が過ぎていった。授業を受けていても、歯痛の方に皆、神経がいらっていた。6月下旬には兄の結婚式があり、兄夫婦は同じ敷地内の離れに住まうことになった。この前後の面接ではやはり性についてのこだわりの話題の中心になっていた。それは次のようなことである。今まで性的なことに興味があって、週刊誌などもよく読んでいた。話の途中で、すぐにそういう冗談などが口からでて、性的な知識が多すぎる。中1の頃からオナニーをしていて、それに対するすごい罪責感がある。男がそれをするのは普通だと思うが、女がそんなことをするのは許されないとだと思ふ。高2の頃、よく遊びにいったりきたりしていた級友と一緒に寝た時に、かなりきわどいことをした。その時は、自分の方がすすんでいたのも男役みたいになってリードし、彼女の方はみたまされた感じだったが、自分の方は、相手の子が何か汚いという感じであまり自分の性器にさわりがらなかったのがすごく嫌な気分として残った。翌日、その子は平気な顔をしていたが、大学に入ってから性体験をした。自分が女のよろこびを教えたためにそうってしまったのではないかと思える。男の人は白い画用紙に自分の絵をかきこんでいくのを望むのだときいたが、純潔という観点からいって、もう自分は汚れてしまったのだという感じが嫌で重くおしかぶさってくる。自分だけが異常な気がする。教会にきている女の人は、すごく清くみえて、自分はその清さにもう戻れないのだという心の傷があって、どうしてもあいう清い人たちと同化できない。他の女の人はそういう性欲などを全くもっていない気がする。

今は家中、兄の結婚の話ばかりで嫌になる。母が兄に夜はこうしてあげなくてはいけないなどといっているのを聞くと、嫌な感じがする。結婚前のセックスが汚いものとみられて、結婚後のセックスはどうして正当化されるのが、その考えがわからない。結婚の枠をはめようとすべてが汚くみえる。生理のことなどもすごく嫌、結局女に生まれてよかったと思ったことが一度もない。

赤ちゃんができるとおめでたいとかいうけど、それがわからない。どうも大人の人の心理というものがつかめない。この世にいるほとんどの男女がセックスをしてい

るのかと思うと嫌になる。映画か週刊誌での話ならいいけど、現実に周囲にいる人がそうしていると思うと、受けつけられない何かがある。冗談でならきついてもいい。母に初夜はどうだったときいたり、そういいながら嫌な気がしている。セックスというものはただ卑猥で猥雑で恥ずべきものとしかたらえることができない。風呂あがりなどに自分で自分の体を見て、セクシーだなど思う時があって、嫌な気がする。「私、女の人の裸みるの好きなんです。女の人をみる時に男の人の目でみることがあるんです。すごく淫乱なことを考えてることが多くて、だから嫌というのか。オナニーするにしても、色々想像しながらしているわけですね、そういうことを考えているのが嫌、男の人なら当然でしょうけど。」いつも兄貴がそういう話をしていたので、青春に目覚めるという前にいきなりそういう卑猥な世界に入ってしまったのだと思う。

夏頃は母親に癪癪をおこして、よく対立したりした。秋頃には、「大学がつくづく嫌になる、友達は皆、表面的で適当に無難で平凡で、小グループをつくって自分達さえよければそれでいいという感じ、深い話をしたり、心の底からくつろげるような人がいない」といった話題や基底的な支えがないという不安についての話題が中心になった。「いつも心の中に思っているのは、どうやって生きていったらいいんだろうかということ。ゆとりとか自分のベースがない。自分を出すのが怖い。本当にちょっとしたことで傷つくので、人も傷つけたくないと思って、人との間にすごく距離をとる。人間関係の距離のとり方がわからない。いつも人を中心に動いているというか、結局人に動かされている。」「空間的な距離が精神的な距離になっている。人の側にいくと匂いがするんじゃないかと気になって、気楽に側によれない。本当にその人を理解したいと思っても、自分の領域を侵すような形で近よってこられると拒絶してしまう。キャァキャァ騒いだり、人に優しくしたり一瞬の間はできても、それが持続しない。そう思うと話の中に入っていけないので黙ってしまう。その場では楽しくても、そういうことは心のよろこびではないし、本当の楽しさにはならないので、どうしてもかけがりがさす。かといって黙り続けていくのも辛い気がする。母からも父からも兄からも、すべての人からみすてられるような感じが強い。この病気のために本当にみすてられてしまうのが怖い。母親に拒絶されないような話をしないとまたはねつけられると思って、彼女にすごく気を遣っている。」「どこまで人を信じていいのか、頼っていいのか、期待して求めていいのか、それがいつもわからないので、期待し過ぎて落胆したり、寂しくなったり、友達なんかの場合にどこまで友達なの

か、自分はこれくらいの友達だなと思っていても、むしろはそう思っていなかったり、あえば話して楽しくなるけれども、あわなきゃそれまでで……自分が求めすぎて何か無駄な気がする。」

「どうしても自分ひとりで立っていると、崩れてしまいそうな気がする。自分なりに生きてか死ぬとか、いつもそのすれすれのところで生きている、どうしてこんなに必死になって生きていけりゃいけないのかと思う。どうして自分だけがこんなふうにしていないとられないのか。だけど死んでもそれが解決になると思えない。宗教的な意味でこの世の苦しみ以上の苦しみがあの世にあると思うと、死が楽観的に逃避の場にはならないと思うから、生きることも死ぬこともできない。」

「どうしたらもっとうまく生きれるのか、どうしたらまともな生活ができるのか、どうしたら心に平安をもって生きられるのかということが常に心の中を占めているので、友達と話してもズレがある。友達は皆いい人ばかりだけど、わざわざ呼び出してそんな話をする気にもなれないし、かといって楽しい話もできない。いつも自分を確立しなくてはいけない、生きる問題があるということに戻って、それを解決しないでは一步も前へ進めない、結婚するにしたらって、将来、仕事につくにしたらって、このどうしようもない自分のことが気にかかってくる。」

翌年の春頃までは、大体上のような話題が多く出されたが、春頃は比較的安定し、「より女らしくなりたい、将来結婚できたら一番いい」といったことが話されるようになり、神への信仰もより深いものとなっていった。匂いのことは依然として気にはなっていたが、他方では次のような気がしていた。「最近少しづつ道が拓けてくる感じがする。何とかやっていけるんじゃないかという……。将来何になるとか考えてはいないんだけど、精神的に余裕がでてきた。何とかしようじゃなくて、何とかなるだろうという感じ。やはりキリストにかけてみようと思ったら、すごく楽になった。この世の中の動きとか自分が生まれてきたこと、自分の運命、自分の将来、自分の生き方、そういうのはすべてははじめから決っていたというか、すべては支配されている、その中で自分がああしようこうしようと思うよりは、神の支配に身を委ねて生きていくのが一番いいのではないかと思う。“ことは人間の願いや努力によるのではなく、あわれんで下さる神によるのである”という言葉がある。だから自分がもがいてああしようこうしようと思ってもどうしようもないので、無駄な抵抗はやめて、神の計画のままに従っていこうと思う。人間的には疎外されていたとしても、神様のみまもっていて下さるのだと思えば、ひとりでいてもひとりじゃないというか、大自然の創造主でありながら、

自分と一対一でまじわっていて下さるのだから。」

その年の夏頃までは、これまでと大体同様のことが語られながら、あまりかわりなく過ぎていった。6月には教育実習も無事すみ、7月には「公立中学の先生にはなりたくない」といいながらも、一応採用試験を受けた。この頃はかなり女っぽい服装であられ、女性になることの問題がとくに母との関係で障害されてきたのだといった話題や「どこまで女っぽくきれいになれるかを試してみたいと思ったが、もう男っぽくになりたい、何かしらないけど何かが怖い、自分が女であることを意識すればするほど男の人を意識することになるから、そうすると男の人が怖い」といったことが話された。採用試験は落ちたので、家では卒業後のことでよく母親と対立した。

10月頃には、彼女と似ている歌手が結婚して引退したことが話題となり、「あの人がやめるのは寂しい気もするけど、私の青春にひとつのピリオドをうつことになる。よく人から似ているといわれると、自分もそうかなあと思っちゃって、意識してつっぱっちゃったりかなり影響を受けてきたが、あの人の引退によって、偽M(歌手)ではなくて、Bという私個人の生き方が展開していくんじゃないかという気がする」と述べた。

その後は何かみたまされない、つかれた状態が続き、3月には、卒業後のことが決まらなくて、かなり落ちこんでいた。

しかし、4月からは母親の強い後押しで、非常勤(週四日)の教師として就職した。最初は全く自信がなかったが、やっているうちにだんだん何とかやっていけそうな気になってきた。症状は「今日、電車の中ではあまり気にならなかった、教壇に立つ時も気にならない」といい、カウンセリングもそろそろ卒業していきたいという気持ちも出てきている。こうして現在は、ようやく終結が迎えられるような時期にさしかかってきた段階にある。

### 3. 症例3 C夫 28歳の男子、銀行員

#### 1) 主訴

話していて人と視線をあわせることができない。人の視線も気になる。何をしても恥かしい。何かいつも感情が凍結されているような、抑えつけられている感じがある。中学2年の時に、同級の女の子から「あなたは話す時に顔をみないね」といわれてから意識するようになった。すごく視線が気になり、無理に視線をあわせると、全部自分がみずかされてしまうような恐怖がある。家にいる時には視線のことは気にならない。初対面の場合はまだいいが、親しくなりかけると苦痛になる。相手が自分をどう思っているのかがひどく気になり、弱い人間なのに、虚勢をはって強がり、自分をよくみせようとして

しまう。相手が男性だとまだ話せなくはないが、女性だと苦しくなる。そのためひどく疲れやすく、過度に緊張しているので、仕事にも身が入らない。

## 2) 内的生活史

小学校の頃は手がつけられないくらい乱暴したり、女の子をいじめたりした。無茶苦茶に癪癪を起こして、よく喧嘩もした。

習字の宿題があって、家で墨をすっていた時に、お袋といさかいになり、むやみに腹がたつたので筆をふりまわして墨をビシャッとお袋にかけたことがある。お袋はものすごい剣幕で、血相をかえて家の中じゅう追いかけてきたのがひどく恐かったのを覚えている。親父が帰ってきたら、またそのことをいいつけられて、今度は親父から家を追い出された。柱につかまって抵抗したが、ものすごい力で引っぱられて、結局追い出され、夜中まで家に入れてもらえなかった。

中学に入ってからは、おとなしくなり、自分の意見もいわないようになった。小学校の時に自分のいじめた同級生が、中学になったら、自分よりも強くなって、逆におどかさされた。それからは喧嘩しても、自分がやられるのではないかと恐くなり、同級生に対しておびえて恐怖感をもっていた。中学に入学した日、運動場が小学校と比べてグンと広くなったのを見て、自分だけがひとりにされてしまったような、何とも恐ろしい気がした。

中学2年以降はすごく視線が気になって、感情的には恥かしいという気持が常にあった。その後ずっと視線恐怖が続いている。高校時代は自分の気が小さいわりに、いわゆる不良というか派手に遊ばまわっている連中といさかいを起こしては、カッとなってすぐ喧嘩しそうになったりした。

その頃は親父の性格がすごく嫌いだった。親父は理工系に行けと何度もいったが、自分としては対人恐怖の方がいつも頭にこびりついていて、何とかしなくちゃいけないものすごく不安が大きかったので、大学のことなどはとても考えられなかった。親父はそんなこととは知らないで、「お前は何をやっていくんだ」とか「お前は意志が弱い」などとよくいった。自分はそういう話になるとカッカときて、自分の部屋にこもって避けていた。人とあうのも嫌だったし、外出もしたくなかった。こんな性格ではたとえどんな大学にいても、どんな職業についてもやってはいけないと思われて、何とかしなければいけないと考えたが、実際生活では性格強化の本を読むぐらいで、何もやる気がしなかった。無気力でボケーッとしていて、よく朝寝坊したり、赤点もいっぱい、追試の連続で何とか卒業できたような次第だった。

入学試験を受けるといって、東京にいる高校時代の同

級生のところに泊ったが、結局試験は全然受けなかった。そんなことでついに、三年間の浪人となった。その間、浪人二年目(19歳)の春から、新聞の広告でみた森田療法の本を読んで、その診療所に四カ月間入院した。入院中、相当費用もかかるので、親父に負担をかけるなど悪い気がして落ち着かなかった。親父はそんなこと誰でもあるんだから甘えているのだといったので、要するに自分が無駄金を使っていると思っているにちがいないという気がした。しかし、その間、一回もお金のことはいわなかったから、結局両親とも何だかんだといていつも僕にはすごく甘いのだと思う。

診療所では「言葉で覚えても駄目だ」「迷っているうちはわからない」「とらわれているうちは動けない」などと何度もいわれたが、あまり影響はなく、退院時にもよくなっていなかった。

その後、東京の私大にすすんだが、あまり自由になったという感じはなかった。診療所で知りあった人も東京だったし、何となくたまたまそこに進んだというのにすぎなかった。大学の入学手続きにはお袋がついてきたが、その時、お袋から離れる不安がすごく大きかった。中学に入って運動場をみた時にひとりになってしまう感じがしたのよりも、ずっと大きな不安で、ひとりになってしまう、お袋の側にいたいなという感じがした。

大学時代は、下宿にひっこんで寝ていることが多かった。やはり対人恐怖で、外へ出るのがおっくうで、最底の単位をとる分だけ出席して、友達づきあいもほとんどなかった。

卒業してすぐに就職した。最初のうちはすごく緊張して、上役にはいいたいことをいう人が多いので、いつも自分が何かいわれるのではないかと気がして、昼の食事なども極力、時間をはずして人のいない時に食べていた。就職して今年で満四年になるが、この間は仕事に熱中することで、対人恐怖のことは何とか今までごまかしてこることができた。最近28歳にもなると、上役や先輩から「その年でガールフレンドの一人もいないでどうする」とか「職場では女嫌いで通っとるぞ」「結婚はどうなってる」などといわれる。最近も同僚の女の子をお茶に誘ったが、思ったよりスレていたのもう付きあう気がしない。来談した前日にも見合いをしたが、その女性との交際は継続している。このところまた、視線や人のことが特に気になりだし、仕事にも手がつかなくなってきた。

## 3) 家族構成

彼は60歳の父親と51歳の母親との間の一人子である。父親は高小卒、公社社員。性格はC夫に似て、実は弱いのにいばっている。家庭的には無関心で、C夫は小さい

頃からどこかに連れていってもらったとか、一緒に遊んだとかという記憶はない。彼が高校の頃、父親は、自分は学歴がないので駄目だが、勉強して資格さえとれば上にあがっていける、お前は国立の理工系にいけ、私立は駄目だ、というようなことをいつもいっていた。これはC夫の理想の男性像とは正反対で、自分が学歴がなくて出世できずに辛い思いをしたというのは、結局、自分の無能力さをカバーしているだけのことで、そんなことをいっていつまでもクヨクヨしていないで、サッパリした方が男らしいし、本当にそう思うのなら色々道はあるのだから黙って努力すればいいのではないかと反撥したくなったという。ただし、入院したり、大学の下宿生活などかなり金銭的に援助してもらったことには感謝している。

母親は高女卒、今でも彼の服装とか食事とか身のまわりのことはよく面倒をみてくれて、過保護、過干渉なくらいの人という。彼女は小さい頃に母親をなくし、父親の母親に厳しく育てられた。何かあると、それはわがままで、自分勝手だといって彼を抑えこむところがあり、自分の苦しみはいくら言葉にしてもわかってもらえない。自分がこういうふう自立心が出てこないように育てられたのは、母親のせいだという怒りと不信感がある。その反面、この母親に何か話そうとする時にはものすごい恐怖心を感じる、と彼はいう。

#### 4) 「症状」について

とくに電車からおりた時などに人がワァーといて、自分がみられている気がする。話していて間が悪い、人からものを頼まれて嫌だなと思うこともあるが、その感じを相手に悟られてしまったのではないとか、自分の視線をみられて自分の思っていることが暴露されるんじゃないかと思える。

最近仕事をしていて、この頃、君がちっともきてくれないから他にかわるとかいわれることが二、三件も重なると、次のところにいっても自分が嫌われているような、断られる気がしてセールスしないで集金だけで帰ってきってしまう。お客さんに領金を頼む時でも自分の中に抵抗がある。何か頼みにくいという気がして、話がうまくすすんで新規契約をとった時などでも、あたふたと逃げるように飛びだしたくなる。逆にお客さんから僕の成績に関係のない雑事を頼まれた時の方がほっとする。

職場でも同僚は気軽に女の子などにあれしてくれ、これしてくれというが、僕はちょっと無理しても自分でやってしまう。もっと気軽に頼めたら、もっと能率があがるのにはと思う。先輩などがよく女の子に性的な冗談をいったり、お尻をさわったりして、それで女の子もキャアキャアって喜んでるが、どうしてあんなことがで

きるのかと思う。自分にはそういう冗談などとても恥かしくていえないし、そういう冗談が自分の方にむかってくると対応できないので困ってしまう。

それによく宴会があるが、いつ歌われるのかとそっちの方ばかり心配している。次長などが目の前にドカッと座って「結婚はどうなってる」「女嫌いで通ってるぞ」などと切り出されると、そばに女の子もいるし、恥かしくてしようがない。そういう話だと、無関心をよそおって、ポーズをつくっている。自分としてはちょっとエッチな冗談いって発散できれば、どんなにいいかと思うけど、無関心をよそおっているの、女の子に興味ないと思われる。それでこの間のロールシャッハ・テストで、あまりにも性的なイメージが多かったのに自分でも驚いている。自分では本当に性的なことに無関心ではないかと思っていたので、あれほど出てくるとは思わなかった。やはり性的なものを汚いものと捉えているのではないかと思う。家で両親と三人でテレビをみていて、「11PM」などがはじまると、僕も親父もお袋もバツが悪いので意識的にチャンネルをかえてしまう。中学1年の時、まだカレンダーにあんまりヌードもなかった頃に、ビキニ姿の女性のカレンダーがあって、やはりバツの悪い感じというか、とくにお袋に対してそういう感じがした。

女の子の場合、人間というよりすぐ異性であることを意識してしまう。男らしくなくちゃいけないというモットーがあって、28歳にもなって恋人もないのかといわれると面白くないというふうに感ずる。お得意さんから「お見合の相手にいい人がいるんだけど」などといわれると、自分にはいないようにみえるのかと虚勢をはってしまうので、相手を黙らせてしまうことになる。母親からは、「お前は主体性がなくて相手の態度でコロコロかわる、相手が気を悪くしたとか気をまわしすぎて、自分で勝手に判断して悩んでいるから、そこを治さなくてはいけない」といわれたので、「誰がこんなふう育てたんだ」と非常に腹が立った。ただ、そういうふう感じやすいとは自分でも思うが。

毎日の仕事でも、表面上は主体性をもってやっているつもりだが、判断になるとできない、優柔不断で、とくに貸し出しの相談に弱い。まだ貸せるかどうかわからない時に、お客さんからグイグイどうだ、どうだといわれるのが嫌で、顔を出せなくなってしまふ。

会社に入った当時は、対人交渉が苦手であることを隠して無理に冗談なんかいって訪問していたが、最近思うことは、人が恐いので事務ミスをしたり、怒られるんじゃないかと思えていきたくないということでセーブがかかってしまっている。いきにくい家の隣にいかなければならぬ家があったりすると、何とかみつからないよう

にと神経をつかってしまう。

この間、後輩の女子職員から「Cさん、日曜日は何してるの？家でポケッとしてるの？」といわれた。その感じが小馬鹿にされているようにとれて、そう思われているのかと恥かしい気がした。その時は「うん、そうだよ」としかいえなかったが、あとから想えば、「いや、彼女とよくドライブしてるよ」とでもいえばよかったと後悔している。自分にはすごい理想像があって、男らしくあらねばならないと思う反面、何かにつけて恥かしいという感じと恐怖感の両方が強い。

女子職員にものを頼んだ時に、一言も返事をしなかったり、忙しそうにつっけんどんにいわれると、僕の方もカッとなって、外にも出てもそれが30分くらい残ってしまう。それで次に頼む時には、僕の方が怒ったような感じになって、それが表には出ないで、顔がひきつったような感じになる。それも出すとまた馬鹿にされた気がして、根にもってしまう。お客さんにもカッと強くけってしてしまうこともあるが、後でひどく後悔する。

#### 5) 治療経過

彼は精神科医から回されたケースである。向精神薬は彼自身の希望で投与されていない。筆者との面接は計10回行われて終結になった。1回目と2回目は職場での人間関係の話、3、4回は父親が交通事故で入院したことから父親に関する話題、それ以降は見合いした相手との関係についての話を中心となった。彼女とは何となくつきあいを重ねていたが、「笑って話をきいてくれたり素直だなと思う反面、わからないことはわからないといって続けて話させない方へもって行ってしまふところがあるので強情なのかと思って、頭にきたり、自分とはあってないんじゃないか」と考えたり、職場では何となく話しにくい人だというような感じで困りの人が壁を感じているように思えるので、そう考えると彼女が自分みたいな人間でもつきあってくれるのは有難いことだと思ったりした。彼としてはむこうから断ってほしいと思うような迷いもあったが、しばらく前に二人で映画にいった後、雰囲気酔って結局、いくべきところまで行ってしまっていたことが彼の弱みになっていたため、現実的に話しはどんどんすすんで、見合いの三カ月後には結納がとりかわされ、さらに三カ月後が結婚式の日どりとされた。

第7回目の面接では母親と大喧嘩して、なぐってしまった話がなされ、その後の三回はとまどいながらも、いわば消極的な形で、結婚してこうとする方向への動きが語られた。夢で、こっちから断るのではなくて、むこうが断ってきて自分の方があわてたというのをみたとのことであった。また、相手にかなり母親的なものを求めていることに気付かれ、「色んな夫婦をみていると、男の

方が子供扱いされて、いいくるめられたり、すべて奥さんまかせしたりしている、現に仲人夫婦がそう、先生がいわれた性格的なものが相手によって決ってくるということを実際に考えたが、相手のことはなるべく理解してやっていきたいと思う」と述べられた。

第10回目の面接では、対人恐怖症状について、「そういう面も出てると思うが、それでも仕事に出れば別に感じない」し、「転勤で今度きた次長がつまらないような意見でもとりあげ、積極的に支持してくれて、そういうふうに熱心に理解してもらえると、こっちも恐いくらいに責任を感じていい加減にすませなくなる、対人関係のことはもっと馬鹿にならなきゃいけないと思う、面接のはじめの頃と比べると、体力がついてきたというか苦しいことも耐えられるようになってきた、いっぺんにはできないから、ひとつづつやっつけていこうと思っている」とのことであったので、その回をもって面接は終結にされた。現在はおそらく幸福な結婚生活が営まれていることであろう。

#### 4. 症例4 D雄 来談時19歳の男子大学生

##### 1) 主訴

人にあうと、顔がひきつって、体全体が硬くなる。電車にのっても、みられているような気がする。表情がひきつった感じになり、それを意識しているのを人からみられると、余計嫌な感じがして、どうしてもますます意識してしまう。教室でも、隣の人が気になり、気楽にしていられないので、授業の方はうわの空になる。人がいると、普通のようにふるまえない。他人からみられると身のすくむ思いがする。そのために頭痛、頭重感があり、首が痛くなったり、歯のかみあわせが不自然で口のあたりがつったようになる。呼吸は無意識にしているが、これをいつも意識しているような息苦しさがある。

##### 2) 家族構成

D雄は現在47歳の父親と41歳の母親との間の長男である。同胞には下に高校3年生の妹がある。父親の職業は大工であるが、性格的にはD雄によれば、「気が小さく、短気、人まえでは大らかで社交的、表面と内面がちがっている、しつけは厳しい面もあるし、放任の面もあるが、勝手のいい時に怒ったり、甘すぎたりあまり一貫していない」ような人であるという。

母親は、「ほがらかで、すぐ妥協するタイプ、小言はよくいってうるさいが、こっちがしつこくいっていけば、いいなりになる、怒ってはみるけれど怒りきれない」ような性格のもち主である。妹はおとなしく、目立たない。

家庭の雰囲気には、「ちょっと陰気で、お互いに気楽に話せない感じ」があり、D雄が中学の頃には「反抗期と

「うのか、父親に反撥してよく叱られ、それ以来あまり父親とは話さなくなった」という。

### 3) 内的生活史

両親は子供は自分の思い通りになるものだという考えで子供たちをしつけたように思う。両親とも、自分の関心のあることは気がむいたように色々いって、関心のないことは放ったらかしで、親のわがままな育て方をした。もう少し、人間というか、子供の本分や主張を受け容れてほしいと思ったが、自分の意志は無視されたり、防げられることが多かった。

ただ、小さい頃、自分はすごい腕白でいたずら好き、いろいろ悪いこともやって、よく先生からも怒られた。しかし、その頃でも気は小さかった。幼児期は、田舎のことなので近所に遊び友達もなく、ひとりで遊ぶことが多かった。

小学校に入ってからは、年上の友達とよく遊んだ。そのために、どちらかといえば、ハイハイと人についていくような感じで、積極的に自分の方からリードしたり、人の優位に立つようなことはなく、どうしても自分を控え目にする習慣が身についてしまった。高校の時は委員などもしたが、あまり本意ではなかった。

中学までは多勢、友達もいたし、何も意識しないで自分の想う好きなことができた。成績は小中とも普通くらい。中学の時は、皆の前で発表したり話したりすることは弱くてあがってしまったり、女の子なども一緒にいると顔が赤くなったりした。これはその後なくなったが、かわりに人にみられている感じがするようになった。この頃は父親とよく喧嘩した。テレビ番組のこととか、僕はタバコが嫌いなのでそんなこととかつまらない理由だった。3年の時、一度なぐりあいの大喧嘩をしたこともある。一晩たったら、両方ともそのことは口に出さず、そのままスッキリしてしまった。だいたい母親が仲介に入ってくれたので、普段はそうひどいことにはならなかった。

ところが、高校になって変化があらわれてきた。親しい友達がなくなったし、女性を意識するようになり、自分の顔や服装も意識されて、よく鏡をのぞきこんでいたが、高校2年の頃、対人恐怖の人をみたことから影響されてしまった。つまり、電車の中でむかい側に座っていた人がチラチラこっちをみて、顔をひきつらせて気まずそうな顔をしていたので、「変な人だな、何であんなふうになるのかな」と思ってみているうちに、自分もそうになってしまった。高校時代はこういうことがそれほど永くは続かなかったが、大学に入ってから、よく意識されるようになった。受験勉強はちっともやる気がなかった。何とか私立大学の工学系に進学して、機械科を

専攻したが、機械にそれほど興味をもっているわけではなく、なんとなく選んだという感じ。大学2年の春にはじめて相談室を訪れたが、この頃は人を意識することがすごい悩みになっていた。はじめのうちは、自分で治そうと思って、本なども二、三冊読んでみたが、そうすればするほどますます深入りしていく感じで、どんどんエスカレートしていった、いても立ってもいられないようになっていった。

### 4) 「症状」について

大学に入学した頃から、人にみられているような気がして顔がひきつったようになる。大学にあまりなじめず、友達といっても一度気まずい思いをすると駄目になる。大学は席なども自由で、そういう自由さから影響されていて、特定の人ではなく色々な人と接しなくてはいけないのも困る。いつもつきあっている友人は数人いる。彼らは自分の症状に気がついているとは思いますが、とくに何もいわない。自分としては、とにかく誰とも話せて、どんなところでもあがらないのが理想。高校時代には委員などもしていたけど、大学に入ってからはそのような機会がないので、どっかですれたのかもかもしれない。今のようこういう時（面接）はいいけど、いっぺん意識しだすとどうしようもなくなってしまう。高校の時は、委員として皆の前で司会などすることはできたが、当てられて本を読むことなどはドキドキしてしまった。そういう状態の時でも、司会として教壇の上に立つとよかったのが不思議な気がした。

今でも自然に自分をつくろうようにしている、歩き方とか態度にしてもそう。すべてに意識しているから、頭痛がしてズーンと重い。この意識しているということが辛い。

最近は何もやる気がしない。勉強もしたくないし、テレビもみたくない。充実感がない。何か資格をとるにしても、目標とか目安がない。面倒くさくて、機械にしてもそれほど興味をもっているわけではない。高校に入る前は多少好きだったけど、高校はまあ義務みたいにやっていた。このままいけば、機械の会社とか何かに行くんだろうけど、ただ会社に入って、平凡にやるだけでは面白くない。今までも普通にきて、普通に大学に入って、普通にやっているだけ。クラブは通学に時間がかかるので、入っていない。

今は女の子に関心があって、女の子の友達がほしい。高校は男ばかりで女の子に接する空白があるから、よけい不安があるのかもしれない。だから電車のむかいの席に女の子が座っていると、普通とはちょっとちがった気分で不自然に意識する。今の気持では、相手に悪い感じを与えそうなので積極的になれない。自分の症状が男性

に気づかれはしても、女性には気づかれたくないという見栄というか、虚栄心みたいなものがある。

友達といっても家でも、心の中から笑うこともある。しかし後でシーンとなった時に、そのことがあまりに幸福すぎたような場ちがいな感じがする。心が通じすぎるとそうになってしまう。どっか心の中でぬけてた感じ、丸の一部が欠けたみたい。だから、あんまり調子よくいくと不自然じゃなくちゃいけないと思ってしまう。自分で自分に自信がないので、女の人とつきあうにしても、自分が相手に満足いくかどうか、そういうことを考えてしまう。劣等感といってもいいが、自分をもっと立派なものでなくてはならない、人にとって面白い存在、頼りになる存在でありたいと思う。だから、心が通じすぎると遠慮してしまう。

自分はどういうふうにしていったらいいかということ、心の中での自分のおきどころをどうしたらいいかということが問題になる。だから、役者みたいにその役になりきれるといって、素直にとけこめる、どんな変化にも対応できるような、そんな心のあり方にある。役者は人まえで、笑いたければ笑えるし、泣きたければ泣ける、歌もうたえるし、不自然にではなく、そういう多様性のある人間になりたい。あんまりしゃべりすぎても自分の性格にあわないし、あんまりしんみりしすぎても自分にあわない。結論としては、自分の性格にあった自分になりきれないということ。だから、授業中もおどおどして、当てられるとドキドキして黒板に書いている。しかし、黒板に書くことが本来の仕事なら、それは当り前のこととしてできるでしょう。そうしたら面白いでしょう。普段はいくら無口でも、演説会があれば堂々としゃべれるような、口から出たことがすぐ表現できるような、そういう人間になりたい。そこのところにひけ目を感じるし、他人がそうできると、うらやましくも思う。要するに、無心になりたい。

高校の時は友達が少なすぎたのに対して、今は少し多すぎるのかもしれない、自分がその友達になりきれのかという心配がある。症状が全然おこらないという確信ができたなら、堂々とやっていけるという自信はある。ただ、今はまだ本当の自分をとりもどしていないという感じだから、消極的になってしまっている。

自分の性格としては、陽気な方だと思うけど、心の方では陰うつというか、反対みたい。しゃべる時は面白いこともしゃべるけど、黙っている時は黙っている。そういうところで不自然さが出て、さわりだ後シーンとなった時のことを不安に思ってしまう。

朝目覚めた時が虚しい。勉強や趣味のサポテンもやっ

んでやっていくかどうかははっきりしない。機械の方を本当にやっていくつもりかと思ってしまう。親父や他の人は大工をやったらどうかという。まあ悪い仕事ではないと少しは思うけど、ただ世間と離れた孤独な仕事でしょう。社会的組織とか社交面から離れてしまうのは嫌だと思ふ。だから、勉強が全然手につかなくて、やる気がまるでおこらない。決心というか心づもりがどうしてもできなくて、何か充実感がない。将来の進路も全然はっきりせず、機械と云々云々を云々云々で全然何もわかっていない。毎日が同じことの、それつまらないことのくり返しで、けだるい。

何か周期的な感じもあるみたい。気分のいい日が続いたり悪い日が続いたり、一週間のうちに一、二回変動する。出てくる時よりも、帰りの電車の方が余計に気づかっている。一日のうちに気まずい思いがつもって行って、帰りの電車ですれがたたってしまう感じ。困りが明るかったり楽しかったりする雰囲気であれば、こっちも楽しくなる。だからこっちが気まずい思いをしていけば、それが相手に伝わる、それが嫌だと思ふ。

##### 5) 治療経過

彼は大学2年の連休明けにはじめてわれわれの許(病院)を訪れた。大柄で体格もよく、彼自身は高校時代に顔がよくないのを悩んだというが、実際は目鼻立ちのはっきりしたいわゆる好男子に属するタイプである。治療者に対しては、愛想もよく、そらさないように対応する。彼が以上のように語らないかぎり、周囲のものが彼の内面の悩みに気づくことは、おそらくないであろうと思われる。

この年の夏休みまでは、毎週面接が行われ、並行してマイナートランクライザーも投与されたが、6月末頃から次第に楽になり、かなり落ち着けるようになっていったので、夏休み明け以降は月に一回程度の頻度で面接が続けられた。その後は、「大体いいが、時々調子の悪い時もある、多少症状はあるけど、そんなに耐えられないほどではない」とか「何かまだすっきりとは治ってない感じ」と述べる状態が続いていた。

3年生時の春頃には、「大学とか家とかでは全然異常ない、ただ電車の中では不安になる、やはり人にみられたくない、それと、意識していないと悪いというのか、今までそういう習慣だったのでそうせねばいけないというような気がする」「電車の中では研究心から、僕と同じような症状の人はいないかとさがしてみる、そういう人がいると、自分も影響されて、調子が悪くなる」といったことが述べられた。この他には、いわゆる、「勤勉さの拡散」状態についてよく語られたが、症状の点では全般に順調で、面接回数もかなり減っている。この間にはまた、



比較的生き生きした表情で「症状はあるが、ある程度浅いところでとまっていて、そうひどくはならない、前とは少しちがっている、この間、ひとりの女の子をみつけてデートしたが、その後がちっとも発展していかない」と述べられたりした。薬はこの頃から断続的に服用されるようになり、飲まないとき多少不安になって、また続けられたりするという状態であった。

4年生時の春頃は、また多少意識することも多くなり、以前と同様に次のようなことがよく語られた。「あらたまった話をする時とか女の子が一緒にいたりする時には、気おくれというか、大丈夫かなという気がして、そういう対人恐ろしい面での劣等感がある。どうしても相手にさくられたくないという感じがする。そうすると、余計に気になりだすし、そういう面がぬけない。自分ではやっぱり不自然なところが一番嫌い。自分の行動が形をつくらせて話したり行動したりするのが不自然で、嫌な感じがする。何かどこかに不安感というか、そういうものが心の中であって、どうしてもとりのぞけない。相手を気にするしないという以前にまず、顔がひきつるとかみられるということが気になる。自分の心の中を読まれたくない、対人恐怖だと勘づかれたくないという気がする。そうすると、どうしても控え目な行動になってしまって、いなおおることができない。どうしてもかくしたくなるというのか、自分はこういうふうじゃないんだという意識がどうしてもあるというか、それで余計、外向的な面をみせようということになって、ますますギャップが出てくる。もっと外向的で社交的な面がほしい。やっぱり完璧ということを目指から。

何んにも考えずにそのままであればいいけど、何かちょっとしたキッカケがあると、徐々に積って行って我慢できないくらい辛くなることもある。二人だけでいて沈黙、というのが一番困る。地下鉄だと窓ガラスに自分の顔が映って、友達の顔も映るでしょう。そうすると、自分の顔がみられているということが気になるし、そういうことが続くとストレスになって、二、三日調子がくずれる。

他人がいると、どうしても形づくった自分を見せるというか、型にはめて身づくろいしているという感じがする。ひとりだと自分の意志のままに行動できる。だから普段はひとりでいることが多い。ひとりでスケッチにいたり、サボテンをいじっていたりすると、心がなごんで落ち着く感じがする。そういった安らぎのいいのときが一番楽しい。

そういうしんみりしたことが好きな自分と、にぎやかでありたいという反比例した両面がある。人まえでふるまう時は、本来の自分よりはにぎやかな茶目なところが

あって、そうになってしまう。しかし、孤独が好きな自分からすると、茶かしたことをしている自分は、それも本来の自分だけど、何かつくっているという感じで、うるめたい気がする。大声で笑っていても、本心から笑えないで、すぐ笑いがさめるという感じをうける。

意識すればするほど意識してしまう。今の4年のうちに何とか治しておきたいという気持がして、最近焦っているの、余計意識するようになってしまった。」

しかし、この年の秋頃からは次第にまた、軽快の方にむかい、年が明けた1月には就職も決って、「運命は決められた通りに動いているというか、そういう観念をもちはじめた」と述べられている。また、ガールフレンドもできて、時々つきあっているといい、「前のように主に女の子を意識することは少なくなった、全くなかったといえないのは、こっちから意識しなくても、むこうが意識することもあって、そのために意識させられるから」だとも語っている。

その年の5月、就職して一カ月あまり後の面接では、「忘れるということが最近できるようになった、自分でも良くなった感じがする、前よりは窮屈さがなくなった、営業なので車で外に出ることが多く、会社に閉じこもっているわけではないので——、多少おかしくなることもあるけど、実際に前より余裕が出てきたような気はする」と述べられた。そして面接はこの回をもって終結とされた。

その後、知りえたところでは、大阪の支店（設計）に転勤となり、四人部屋の寮でうまくやっていて、恋人もできたとのことである。

## 5. 症例5 E 郎 27歳の男子大学生

### 1) 主 訴

卒業と就職が決まらず、精神的に参っている。公の場に出ると硬くなって手がふるえる。女性と気楽に話ることができない。

### 2) 問題の発生と経過

E 郎は夜間大学に進学後、昼間は百貨店の電気関係の仕事に従事したが、学生という身分もあって、なかなか仕事仲間にとけこむことができなかった。気晴らしのためにインドまで二回登山旅行をしたが、この旅行中やアルバイト先で、精神的に疲労した人やおかしい人と一緒になり、やりきれない痛手をうけたという。

ゼミ論がうまくすすまない焦りから、次第に大学には出なくなり、職場でも他のバイト学生と年齢が違うことが気になり、自分が「普通ではない」とみられている感じがして萎縮し、みじめな気持になった。銀行とか喫茶店などの場所にいくと落ち着かず、手がふるえる。字をま

ちがえたり、抜かしたりしてしまい、物忘れもしばしばしてしまふ。講義でもリラックスしてきくことができず、どこにいても落ち着かない。後期試験の時には手がブルブルふるえて字が書けず、思いあまって教官に相談し、当相談室を紹介された。

### 3) 家族構成

故郷には祖母と両親が健在であり、彼は五人同胞の四番目、三男である。生家はすでに32歳の長男が跡を継ぎ、彼以外の同胞は全員結婚し独立している。現在62歳の父親は、気性が激しく相手にものをいわせないところがあり、毎日喧嘩口調ですごしているとのことである。

### 4) 生活史

子供の頃は、家庭内で暖かい世話を受けたこともなく、友達の間でも抑えられるようなことが多かった。中学校卒業と同時に家出した。理由はギスギスした家から脱出したかったことと都会への憧憬とであった。

電気技術者養成学校に二年間通ったが、この頃、人まえやバスケットの試合であがって、実力が充分に出せないという辛さを経験した。

卒業後は自転車関係の会社に勤め、定時制高校に通った。寮や下宿では他の寮生や屋主さんとうまくいかず、ついには一軒家を借りてひとり住まいをした。そんな中で高校の先生と山岳部の先輩がよき相談相手になってくれて精神的な支えとなっていた。

そんな生活が六年間続いた後、大学(二部)に進学したのにもなって退職し転居した。専攻は社会教育。昼間、はじめの二年は百貨店の電気関係の仕事をし、その後もアルバイトで生活費をかせぐのに追われた。そういう社会人でもなく、学生でもない中途半端な状態のため、疎外感が強くなり、自分をみうしない、人間関係に自信がもてなくなった。

### 5) 「症状」について

卒業と就職の見通しがはっきりしない。しっかりした仕事もしていないし、学生としての本分も果していない。同年輩の人ともずいぶん離れてしまい焦りがある。大学で教養を身につけようと思ったが、仲間をうまくリードするようなことはできなかった。精神的な支えがない。社会へ出ても日常のことをする自信がなく不安。かといって家にもすがれない、性格的にアンバランスで、とくに女性に対しては、ザックバランに話せないコンプレックスが強い。

大学には入ってきたが、次の目標が見つからない、福祉の現場という地味な仕事は性格にあわない。自分が不器用であることに劣等感があり、それに挑戦しようという葛藤もある。自分を実力以上に出そうとしたり、優越感みたいなものもあるが、失敗するとガクンとなってし

まう。自分のやりたい方向がわからないし、俺は駄目だという感じばかりくすぶっていて、迷いに迷い、考えに考えてしまってスパスパと処理できない。

後期試験の前後は気が動転して、自分をみ失っていた。周りとの接触がうまくいかず、社会とのギャップに悩む。集団の中で浮いてしまう。誘われても、入りたいのに抵抗感があって入れないし、リラックスできない。とくに黙っている時に堅苦しくなる。俺はこういう人間だと自分をさらけだしたうえで仲間を受け容れられたり、若い人を引っぱっていきたいが、同世代や年下の人とうまくいかない。自分にフィットする場所がない。電気の仕事に実力がついてくれば、満足できるようになるのではないかと思うが、それまでが苦しい。

### 6) 治療経過

E郎とは全部で五回の面接が行われたが、第4回目の面接では、卒業、就職が本決まりとなり、スッキリした表情で安定感をえて落ち着いてきたことが語られ、第5回の面接では、はじめて女の子の下宿へ行って、リラックスして話せたこと、人まえであがり字が下手なのがかいづも心の底にあって、そうした力の発揮できないじれったさや自分を意識しすぎる原因はわからないが、実は自立できてないことなどが話された。

その後3月はじめに、彼から送られてきた手紙の中には、次のようなことが述べられている。「精神的に前より大部落ち着いてきました。現在では人の話がきけるようになってきましたし、あえて自分の事を表現しなくても我慢できるようになりました。家族も以前に比べて柔らかかになり、親父も家の者に対してガミガミ怒るような態度が減ってきている気がします。手のふるえも今はほとんどありません。まだ迷いが完全にとれ、テキパキした行動がとれるようになったわけではありませんが、こうして手紙もリラックスして書くことができますし、頭痛や肩こりの症状も今はありません。今後はとにかく積極的に行動をしていくしかないようです。」

その年の夏の絵葉書には「元気で働いている、軽い目標をたて電気のことを新たに勉強しようと思っている」と記されていたが、それから約三年後に、丸坊頭姿でひょっこりあらわれたE郎は、「その後会社をかわり、今の会社もまたやめざるをえなくなった」と語った。彼は自分のかかえている問題に、あらためて一からとりくむ場を望んだので、現在彼の住んでいる地域のカウンセラーに紹介されることとなった。

## 6. 症例6 F江 来談時18歳の女子、高校3年生

### 1) 主訴

人まえで本が読めない。問題の発生は中学3年の時に

さかのぼる。国語の時間に先生から読みを当てられ、「幾可学」とあるのを「イクナンガク」と読んでしまい、皆に笑われた。その時は一応終わりまで読み、自分ではとりたてて何とも思わなかった。

しかし、高校に入学してから、国語の読みが辛くなった。読みを当てられると、心臓がドキドキ鳴って、赤面してしまい、それらを鎮めようとするときますますドキドキしてしまうので、結局、「読めません」といって着席してしまったりした。

今は、当てられてもつかえつかえしながら読んでいる。そのため時間はすごくかかるし、心臓もあいかわらずドキドキする。読み以外は特にかまうことはなく、先生に質問されても、平気で答えられるし、自分の書いたものなら普通に読むことができる。できるだけ何でも読むように努力している。しかし、国語の授業の時、皆がシーンとして自分に注目していると想うと、もう読めなくなる。クラスの人達は、自分があがってしまって、本が読めないことを知っている。この他に彼女には、喘息の問題があり、また怖い夢をみて金縛りになることもある。

## 2) 家族構成

55歳の父親は、スーパーマーケットの寮監をしている。心配症で神経質な性格で、よく頭痛がするとか、体のあちこちが痛いとか訴え、心気症的傾向が強い。他方、ものごとを一方的に決めつけるところがある。53歳の母親は寮母であり、気丈で頑固だが、さばさばした性格、わけのわからないことでもボンボンというタイプ。母親にも喘息の持病があるが、その他には体は丈夫で、あまり病気をしたこともなく、また病院嫌いであるという。このような両親の夫婦像は、一般とは少々逆転的であるといっている。

22歳の姉は現在、大学4年に在学中。面長で、一見陰うつそうであり、寡黙である。

## 3) 内的生活史

両親の職業柄、現在までに六回の転居をくりかえしている。家族は寮内に住みこんでいるため、食事も従業員と同じであり、つねに従業員の生活が優先されたので、一家で団らんをしたり、家族旅行に出たりすることは全くなかった。

自分の家族は、友達の家とはちがっているとよく思った。両親は休みがなく、皆で旅行したことなど一度もない。両親は夜も忙しいので、家で顔を合わせるのは、夕食の時の1時間だけ。親は「過保護」にしているとい

うが、自分たちからすればむしろ「放任」だと思う。

彼女は小さい頃はよく寮生からかわいがられたが、高校生くらいになると、寮生とも年令があまり違わないため、口を利くことも少なくなった。

成績は中学時代は中くらい、高校時代は上位で、現在は学年で4番、私大志望系ではトップであるという。彼女はクラスで背が一番高く、男子よりも高いので、このことが嫌でしかたがないと訴える。

中学の時は、有名校でもあったので成績もあまりふるわなかったし、皆に笑われたことからコンプレックスをもつようになった。とにかく「恥かしい」という想いかられたのが心に残っている。

その頃は引っ越した後で、親しい友達もなく、まだよく知らない級友たちをすごく意識していたし、ある男友達に失恋して、男性恐怖症になっていた。

高校生になって、はじめは自分だけで治そうとしたが、やはり当たると読むことができず、落ち込んでいた。両親には話しても信用してもらえないと思ったので、黙っていたが、うちあけて来談することにした。

## 4) 治療経過

彼女には全部で8回の面接が行われた。この間には、彼女のみた怖い夢や自分より頭のいい男の人と交際するというような願望のあらわれた夢なども語られたが、ここでは省略することにした。面接の最後の回に彼女は次のようなことを述べている。すなわち、最近はまだ国語の読みは当たっていないし、先生も避けている感じもあるが、当たったら当たった時のことで「読めません」といえばいいのだと思ったら、気が楽になってきた。開きなおった感じで、怖い気持は遠のいてきた。これから3学期にかけて大学受験が始まるので、実際にはここには来られなくなる。最初に読めなくなった時は、半分親しい友達のことをすごく意識したが、今のクラスは男女ともに和気あいあいとしている、ということである。

こうして彼女との面接は終結にされた。その後とくにフォローアップはなされていないが、母親からの手紙によれば、彼女は短大の英文科に合格し、「もう大丈夫だ」といっているとのよしである。

本報告においては、はじめにも述べたように、以上の症例に関する記載を提起しておき、これらの症例についての文献的検討、およびわれわれの立場からの総合的考察は次報において行うことにしたい。

文 献

- Blankenburg, W. 1971 *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien.* Ferdinand Enke, Stuttgart. (木村 敏ほか訳 1978 自明性の喪失 —— 分裂病の現象学 —— みすず書房)
- 池田豊應 近刊 青年期危機の現存在分析的接近 講座・心理療法の実際 8, 村瀬孝雄編 青年期危機の心理療法 福村出版 に所収
- 木村 敏 1975 分裂病の現象学 弘文堂

- Laing, R. D. 1965 *The divided self. An Existential study in sanity and madness.* Penguin Books, Middlesex. (阪本健二ほか訳 1971 ひき裂かれた自己 —— 分裂病と分裂病質の実存的研究 —— みすず書房)
- 田畑 治・生越達美・池田博和・伊藤義美・間宮正幸 1977 臨床青年心理学序説 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 24, 85-106.
- Zutt, J. 1963 Über verstehende Anthropologie. In: *Psychiatrie der Gegenwart.* Bd 1, 2. Berlin/Göttingen/Heidelberg.

(1981年7月31日 受稿)

A STUDY OF ADOLESCENCE IN THE LIGHT OF CLINICAL PSYCHOLOGY (VIII)

– Anthropology of the anthropophobia (1), case presentation –  
Hirokazu IKEDA, Yoshimi ITOH and Osamu TABATA

The onset of an anthropophobia is in adolescence, particularly at the beginning of junior high school age without exception. In this meaning, it may be as well to say this mental disorder is most genuine adolescent crisis. In the developmental stage of adolescence, human beings will become to wake up to a separation of “for self” (für sich) and “in itself” (an sich). Though these aspects of self have been represented in various concepts e.g. “transcendent self and empirical self” (Blankenburg, W.), “self of Noesis and self of Noema” (Kimura, B.) or “ontological self and empirical self” (Laing, R.D.) and so on, briefly speaking, it seems they mean “the self as the experiencing agent” and “the self as what is known”.

In an adolescence the self should be divided into both aspects and moreover they must be no more and no less integrated as a unity. The anthropophobia is a state that unnaturally unintegrated self become a serious problem in context of interpersonal relations, being confronted by such an adolescent task. That is, we think the anthropophobia as a problem of unintegration of “self representation” (“Sichdarleben” – Blankenburg, W.) in company, especially in a dimension of preintentional realm such as “Ki” or “ästhetischer Erlebnisbereich” (Zutt, J.).

The focus of this study is placed on to clear up these psychopathological points of anthropophobic symptoms, and we would like to evident what mode of Sichdarleben become problematic in human relation from the light of anthropological theory of schizophrenia. In this paper, we present phenomenological descriptions about 6 cases of the anthropophobia, then in the next paper, we want to discuss those cases in connection with the literature on this subject and examine them synthetically from our points of view of clinical adolescent psychology.

Case 1 and case 2 belong to the sphere of the borderline case, because a schizophrenic process can be found on the basis of neurotic defense in them. Case 1 persists in severe symptom formation as a defense, by contrast, case 2 is confronted with a problem of selfness of self (identity). Case 3 – 6 can be regarded within the range of the neurosis. They are arranged in order of seriousness of their pathology, for we attempt to approach to the normalcy from the abnormality.